

駐屯地の沿革

練馬駐屯地には陸軍時代部隊が駐屯していた歴史はない。僅かに大東亜戦争開戦直前の昭和15年に東京第1陸軍造兵廠の資材置き場が設けられ戦後は大蔵省関東財務局管理地となっていた。昭和25年朝鮮戦争勃発により警察予備隊が創隊され、程なくして東京江東区越中島に設置されていた第1管区隊がこの地に移駐して来て練馬駐屯地が開設された。その後警察予備隊は保安隊となり更に自衛隊となった。第1管区隊も昭和37年には第1師団となり今日に至っている。第1師団司令部作成の広報パンフレットをそのまま借用すれば今日までの経緯は次の通りである。

イバラの道

以上に記された事柄は当然の事ながら陽の列挙であり、有った筈の陰の事項はない。そこで独断と偏見を懼れず陰の部分について考察してみたい。

興味本位などではなく、在隊した隊員の心にかかった負の重荷に真剣に迫って見たいからである。警察予備隊草創期に駐屯地に押し寄せた群衆から浴びせられた罵詈雑言の中には歯を食いしばるような口惜しいものであったと思う。曰く「アメリカの傭兵」「税金泥棒」。だが朝鮮半島の切迫した軍事情勢に目を向けてその混乱が日本にも及ぶ危険性があるからこそ日本国内の治を守らなければならぬと主張する反論はマスコミに取り上げられることは少なかったようだ。北朝鮮軍は怒濤の如く南下進撃し韓国は釜山地域に押し込められてこのままでは朝鮮半島はソ連の思うままにされてしまう恐れがあり、次は日本かもしれないと云う懸念は現実的なものとなりつつあった。その当時警察予備隊上層部の考えは「再軍備の第一歩」等という迂遠な事ではなく国内の治安を何とか安定させなければならぬという必死の思いがあったのではなからうか。

と云う。「鳩」は平和のシンボルとして知られ軍隊のシンボルとしては軟弱であると云う意見も聞く。しかしその習性は余り人口に膾炙されていないが、自分の種族を残す為にあらゆる手段を尽くす生き物で、その習性を知っていたからこそ、民族将来の繁栄への祈りを込めた印として今も残されているのだという。領けると同時に嬉しい話であった。

先輩の良く知るところであろうが、警察予備隊が防衛省として正當な位置づけに近づきつつある今日、改めて噛みしめるべき歴史ではなからうか。

駐屯部隊

現在練馬駐屯地には次の部隊が駐屯している。

第1師団長隷下部隊

第1師団司令部

第1普通科連隊

第1後方支援連隊

第1通信大隊

第1偵察隊

第1化学防護隊

第1師団司令部付隊

第1音楽隊

東部方面総監直轄部隊

練馬駐屯地業務隊

第38会計隊

第316基地通信中隊

大臣直轄部隊

第102地区警務隊

これらの部隊について若干触れてみたい。第1師団は茨城、千葉、埼玉、

東京、神奈川、山梨、静岡の1部6県

の防衛・警備・災害派遣を担当しており、部隊配置は、図に掲げるとおりである。幾つかの想像することがある。

これらは陸上自衛隊から入手したものでなく、勿論第1師団や、練馬駐屯

地から入手したこともない。我が国

(19年3月号)

陸自駐屯地紹介シリーズ

昭和37年 第1管区隊から第1師団へ

昭和39年 東京オリピック支援

昭和49年 南伊豆沖地震災害派遣

昭和53年 伊豆大島近海地震災害派遣

平成2年 天皇陛下即位の礼参加

平成7年 阪神淡路大地震災害派遣

平成7年 地下鉄サリン事件災害派遣

平成12年 三宅島神津島災害派遣

平成14年 第1師団の改編

平成16年 新潟中越地震災害派遣

平成17年 グラン高原に輸送隊派遣

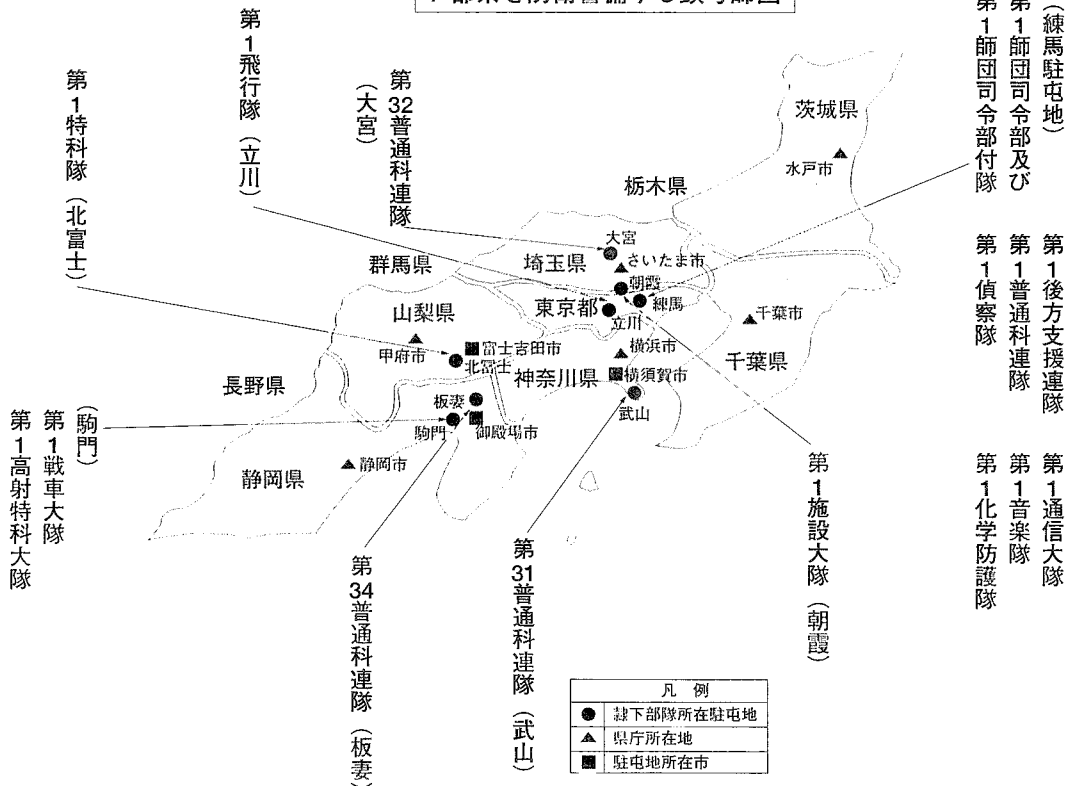
平成18年 第9次イラク復興支援群を派遣

(政経中樞師団へ)

派遣

当時の第1管区隊総監室の壁には「鳩」の飾りがあつて今も残つて居る

7 都県を防衛警備する頭号師団



(練馬駐屯地)
 第1師団司令部及び
 第1師団司令部付隊
 第1後方支援連隊
 第1普通科連隊
 第1偵察隊
 第1通信大隊
 第1音楽隊
 第1化学防護隊

の政治・経済の中心に位置してその防衛・警備・災害派遣に任ずる第1師団は自らを政経中枢師団・或いは頭号師団として心に期すところありと伺われ、その期すべきところを筆者が外側から推察したことである。

第一は、近年の変化した侵攻様相に対処すべく鋭意邁進する司令部、各部隊の姿である。その侵攻の様相は詳述を避けるが、海岸地域などでは無く政治経済の中心施設・要人・電力・ガス・水道等ライフライン、重要産業施設、交通・通信の中枢施設等に指向されると考えてよいが、第1師団管轄地域には警備の対象が無数にあると考えなければならぬ。

第二は、財政負担軽減を狙った勢力削減、部隊の再配置により主動戦力が首都環状線内から移動したことなどの事情から修正した計画に基づく凶上演習、実動訓練に邁進している姿である。

第三は近年益々発生の可能性を論じられている大災害に対する態勢整備の姿である。この地域では、首都直下地震、南関東地震、東海地震の可能性が論じられ既に研究が進められ、対処計画が作られている。そのいずれに於いても第1師団は第一線に立つことになり、他方面隊からの増援部隊も運用しなければならず、毎年の計画作成修正

も並の苦勞ではないと想像するのである。

更にここ数年は地方公共団体が自衛隊に寄せる期待も大きく、災害対処演習への参加や災害派遣計画の配布、さらには自衛官退職者の地方公共団体へ災害対処担当高級公務員としての再就職等がみられ一段と体制整備が進捗している。

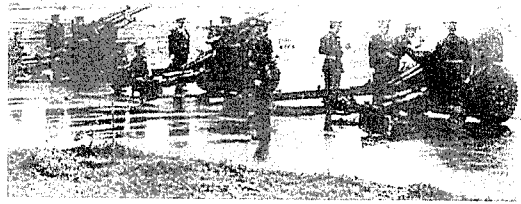
なお、第1師団長は自衛隊記念日のパレードにおいて地上部隊の観閲部隊指揮官として指揮を執っている。

次に第1普通科連隊について述べたい。頭号連隊として過去数度に渉り、防衛庁長官就任直後の初度視察に対応してきた。また市ヶ谷から第32普通科連隊が大宮に移駐して以来都内唯一の普通科連隊となった。迎賓館での堵列任務の回数も多くなるのではあるまいか。一般に都内の部隊は演習場に不自由しており野外行動の各個訓練や分隊訓練の場合でも駐屯地内は勿論近傍でも訓練が出来ない場合がある。しかしながら練馬駐屯地においては空砲を使用する場合周辺町内に広報するとともに区役所に通報して訓練することが可能であるが、連隊・中隊などの野営訓練については、やはり富士、北富士演習場など遠方へ足を伸ばさねばならない。この様な多忙な部隊であるが平成18年の兵庫団体において練馬銃剣道

国家的行事



観開式



礼 砲

チームが優勝している。かつてこの連隊勤務を希望する者が多かった時期がある。その理由は通学希望である。駅一つの場所に私立学園があり今は進学校に姿を変えているが、昭和30年代にはその中学生であった筆者が部活動を終えて下校するころ夜間高校に通う多くの保安隊員とすれ違ったものであった。制帽とジャンパーは幼な心に「かっこいい」と感じたところである。

開くところでは、自衛官として勤務しながら山手線内の大学に通学して卒業し、幹部候補生に合格した者も多かったが、現在では時勢の変化で勤務最優先となり通学している隊員は僅かのことである。

伝統継承

地方の駐屯地を訪ねると、陸軍時代の郷土部隊の伝統継承の証は容易に目につく。ある駐屯地では伝統継承部隊として明確な宣明が行われ、またある駐屯地では戦友会との強い結び付きがあり、また別の駐屯地では広報パンフレットに資料館に関する記載があった。だが練馬駐屯地に於てはその証は注意しないと見出せない位に埋没している感じがした。

留魂の碑（殉職者慰霊碑）

歩兵第1聯隊の碑

駐屯地正門を入り直ぐ右の方向に進むと小さな植え込み地域がある。その

中に最初に目に付くのが正門の方向に向けられて建立されている殉職隊員慰霊碑で、東京都出身の陸海空の殉職者が合祀されている。訪れた時には供えてから日が浅い花束があった。副師団長兼駐屯地司令が着任してここに参拝し捧げた花束だと云う。この後ろに陸軍歩兵第1聯隊記念碑がある。戦前に建立され、戦後川崎市内にあったものをここに移設したのだという。

資料館

正門から左に進むと資料館がある。スペースは広いとはいえず、展示物も多いいとはいえない。東京には麻布・赤坂に第1師団隷下の2個歩兵聯隊の他、近衛師団隷下の各聯隊もあった。

多量の展示物があつて良い筈であるが、都会故の希薄な郷土意識や、大空襲での焼失散逸などで展示品が少ないのかも知れない。中に目を引く展示品があつた。一つは歩兵第1聯隊の軍旗遺片を軍旗状につづり合わせて額に納められて展示されたものである。房の色は褪せて灰色に近くなり歴史の流れを思わせるものである。二つ目は東條大将遺品の国民服であつた。寄贈者の名前には大將夫人の名が印されていた。

地域交流

練馬駐屯地広報班が作成している広報用リーフレットがある。A4判4

枚を連続見開きにして表裏に写真48枚と案内図・組織図が掲載され、上質の紙を使用してセンスに溢れたリーフレットである。その中に年間を通じて行われる少年剣道、少年野球、ダンス同好会の写真と、駐屯地行事として行われる駐屯地創立記念日、駐屯地観桜会、駐屯地納涼盆踊り大会、航空機体験搭乗、更に地元北町阿波踊り参加、北町小学校「葉かげの集い」での第1音楽隊演奏等の写真が掲載されている。大変忙しい勤務環境の中でご苦労極まりないことであるが、写真からは地域の老若男女の笑い声が聞こえて来るようだ。

退職者交流

筆者が駐屯地内を案内されている時司令部隊舎広報の食堂方向から正門に向けて歩いてくる数名毎のグループに出会った。筆者と同年代或いはそれ以上の年齢である。歩いている時の手の振り方、或いは互いに関わらず拳手の敬礼から私服を着ているも元自衛官であることは明白であつた。聞けば部隊毎に行われた年末行事の餅つきに参加したOBであるという。楽しそうであつた。中には名残惜しさに立ち去り難く留魂の碑へ歩みを進める者もあつた。このOB会は、各部隊毎に結成されており、歴史の古い第1普通科連隊と比較的新しい第1後方支援連隊が活発に

活動しているとのことである。
祈ること

年末の多忙な時期に拘わらず丁寧に対応して頂いた事に感謝しながら営門を後にした。途中喫茶店で纏めをした。

第一に、また国家国民が自衛隊に寄せる期待と信頼が増大していることを現職隊員がひしひしと感じている様子が窺えたことである。練馬に限らず全自衛隊が築き上げ、国民を刮目させた災害派遣での実績や、厳正な規律を保持し困難な任務を完遂して世界中の軍隊を驚嘆させたイラク復興支援活動の成果は、次に自衛隊が果たさなければ成らない任務の最低レベルになるであろう。ハードルが高くなったのである。その高くなったハードルを練馬駐屯地では自分たちのハードルとしていることを感じ取った。

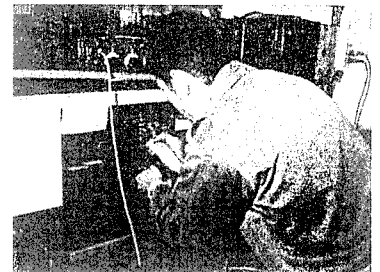
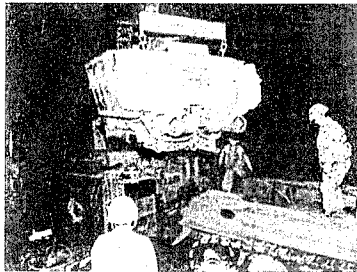
第二に、現役自衛官が心の底で希望していることと、我々退職自衛官が果たすべき役割についてであった。自衛隊草創期、「日陰者」としての境遇を余儀なくされていた平和共存論横行時代には「たとえ日本が滅亡したとしても世界平和の理想達成のため日本は武装してはならない」等と無責任な非武装論がまかり通った時期もあったが、今そんな勢力と主唱者は影が薄い。大いに結構なことである。今日、自衛隊無用論を論理的に展開主張し得る者は

少なく、何でも自衛隊との期待さえ一部には感じられる。だがそのような風潮に浮かれる事無く真に国家国民のため、確固たる位置づけの確立を希望しているのではなからうか。それは庁から省への昇格で終わりとなるものではない。憲法改正と国防軍への脱皮であることは異論がない。しかしその働きかけの運動を展開することは現役自衛官には制約がある。政治的活動になるからである。ここに退職自衛官の出番がある。いや責務と云って良いであろう。とりわけ部下隊員の国防の重要性を説き、何時の日かあるべき姿と成る日までの忍耐を説いた幹部自衛官の責務は明白であると考ええる。偕行社会員の元自衛官こそその一翼を担わなければなるまい。

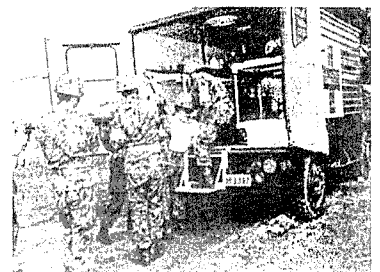
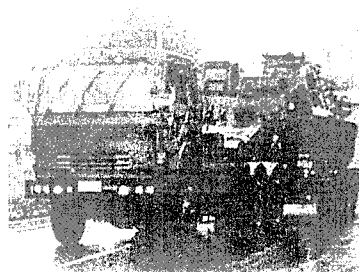
今回の取材に於いて練馬駐屯地広報班から多忙な中にも拘わらず協力を頂いた。お礼申し上げたい。また警察予備隊時代の先輩方の心の支えであった鳩の隊章についてその意味する所を元陸上幕僚長、富澤輝氏陸自60からご教示頂いた事も明記したい。警察予備隊隊員はアメリカの傭兵などではなく我が国家国民の将来を守る志を抱いていたと云う物証が明らかとなり、心に充つるものを抱きながら取材をする事が出来たからである。

文責 松村興延 陸自64

第1 後方支援連隊の各部隊 (後方支援連隊の例として)



戦車・需品・通信等各種整備をする2個の整備大隊



師団の糧食・燃料・飲料水等を扱う補給隊

師団の部隊及び戦車等を輸送する輸送隊

負傷者の治療・後送を実施する衛生隊